

思ひました。けども、夫から一週間は、日本の艦隊（百七十八艘もゐるんですよ）が、まだ東京灣に居て、軍艦の中を誰にでも見せて下さる相だから近い中にお父さんに連れてつて貰ふ約束をしました。

夫から觀艦式の翌日は、東京市中の東郷大將歡迎でね、君、これが又大層なものでしたよ、凱旋門なんて立派な門が、新橋から上野までの間に幾つも出来て居て、東郷大將は立派な花馬車に乗つて、其を通られると、其道筋には何十萬といふ、人が出て萬歳〜といつてお迎ひをする、上野ではぼーんぼーんと、煙火が何百本となくうち上げられる、町中國旗と提灯とで飾つて居る、こんなに勇ましいのは、僕が生れてから、始めての様だつたよ。眞實に東郷さんは、えらいねー、君

こんな風で、先月は中々忙がしかつたのです。今度の日曜日には、僕はお父さんに、團子坂の菊人形を見につれて行つて貰ふ積りで、其次の日曜頭には、兄さんに、瀧の川へ連れてつて下さいと頼んでるのです。そしたら、又其事をかいて君にお知らせしませう。さよなら。

十一月五日

東

一

西藏君

いそぶの話

狐が鶴を困らせてやらうと思つて、ある晩、ごちそーをするからといつて、自分の家へ招びました。鶴はどんな御馳走か知らんと思つて、喜んで行きましたが行つて見て、弱りました。甘し相なお汁

を、平つたい皿にうすべつたく入れて、さわどうぞと狐が出して来たのですもの、鶴の長い嘴で

は、どうして夫が吸へるものですか。
 鶴は大そう夫を残念に思つて、何でもこの敵討をしてやらうと思つて、夫から何日か経つて、狐を招びました。狐は、それとは知らずに何心なく行きました所が、今度は、口の細長い大きな瓶の中に、いろんな御馳走を入れて、「さあお上り」といつて出されました。狐は食べようにも口が這入らない。鶴は、夫では私が一人で食べますといつて細長い嘴を瓶の口にさし入れて、一人でみんな食べてしまひましたとぞ。

不思議な物語 (承前)

太田龍東譯

第四、話の話

ある國の王子に大層狩を好む方がありました。父王は其王子が狩に出るときは澤山な従者を附けて出すばかりでなく、保護の爲め大臣も従はさせ王子を見失ふことのないやうに注意させました。ある日王子は例の様に従者を連れて狩に行きますと、鹿が一疋飛んで出ました。王子はこの鹿を追ひながら深く山奥に分け入り、大臣なども后からついてくることと思ひ、鹿を追ふ獵師山を見ずと云ふ諺の如く、他も見ないですん、山の中に入りました、すると鹿は森の中に駆け入つて姿が見へないやうになつたので、残念に思つてその邊をしきりに探かしても一向知れません。仕方がない